古代山城の城門研究の現状と課題

山口裕平（行橋市教育委員会）

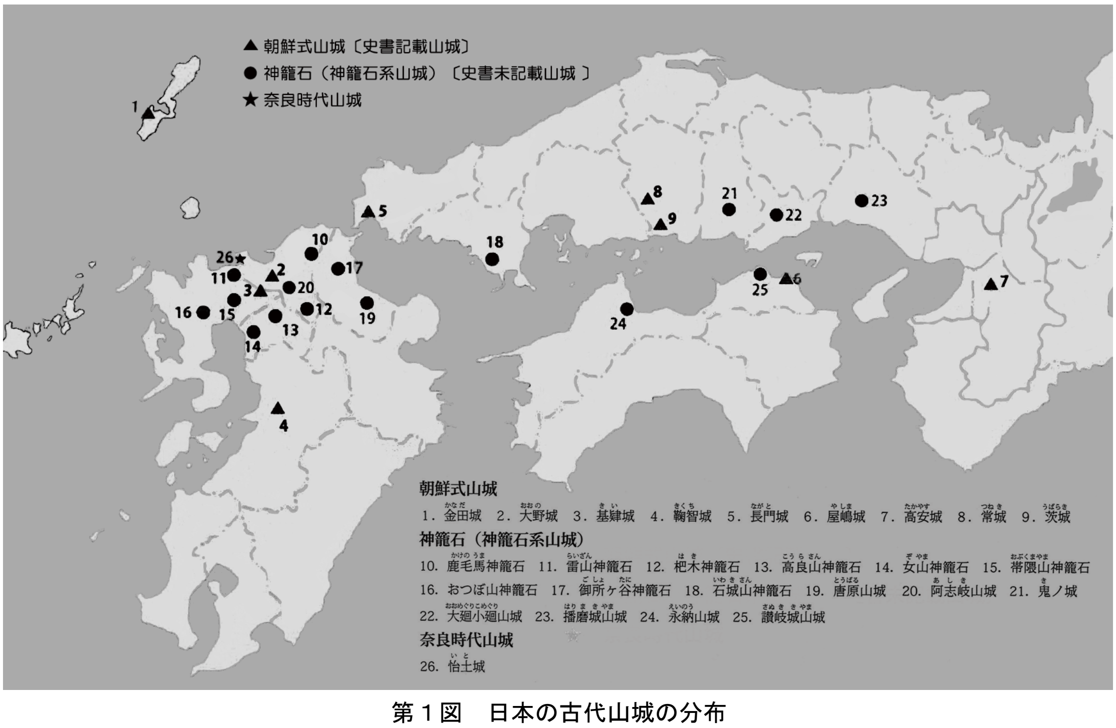
はじめに

　わが国の古代山城研究は近年新しい展開を迎えている。それは古代山城遺跡の史跡指定や整備、災害復旧などに起因する発掘調査事例が増加し、その調査報告書も相次いで刊行され、古代山城を対象とした調査研究は右肩上がりに伸びているといえる。特に熊本県では県を挙げて鞠智城の特別史跡指定を目指した推進事業が各種行われており、本研究会を始めとして、東京や大阪でのシンポジウム、各種講座、若手研究者を対象とした「特別研究」、あるいは「フォトコンテスト」や「子どもスケッチ大会」など枚挙にいとまがない（註1）。福岡県大野城市や太宰府市、佐賀県基山町などで一昨年、昨年と盛大に催された「水城・大野城・基肄城1350年事業」でも、やはり同様に市民参加型の各種イベントが行われ、たくさんの人々が古代山城を媒介として多くの時間を共有した（註2）。また古代山城が所在する自治体間で組織された「古代山城サミット」でも古代山城をまちづくりに活用する方策などが議論され、筆者も業務で古代山城に係ることが多い中、集客力など古代山城がもつポテンシャルの高さは決して低いものではないと、つとに感じていたことである。

　冒頭で述べたように古代山城を対象とした調査研究は増加傾向にあり、その論点も多岐にわたっている。その中でも本論では古代山城の城門遺構について、近年の研究の動向と課題について論じたい。

1．研究史

　古代山城研究は明治期に起こった、いわゆる「神籠石論争」以来100年余りの研究蓄



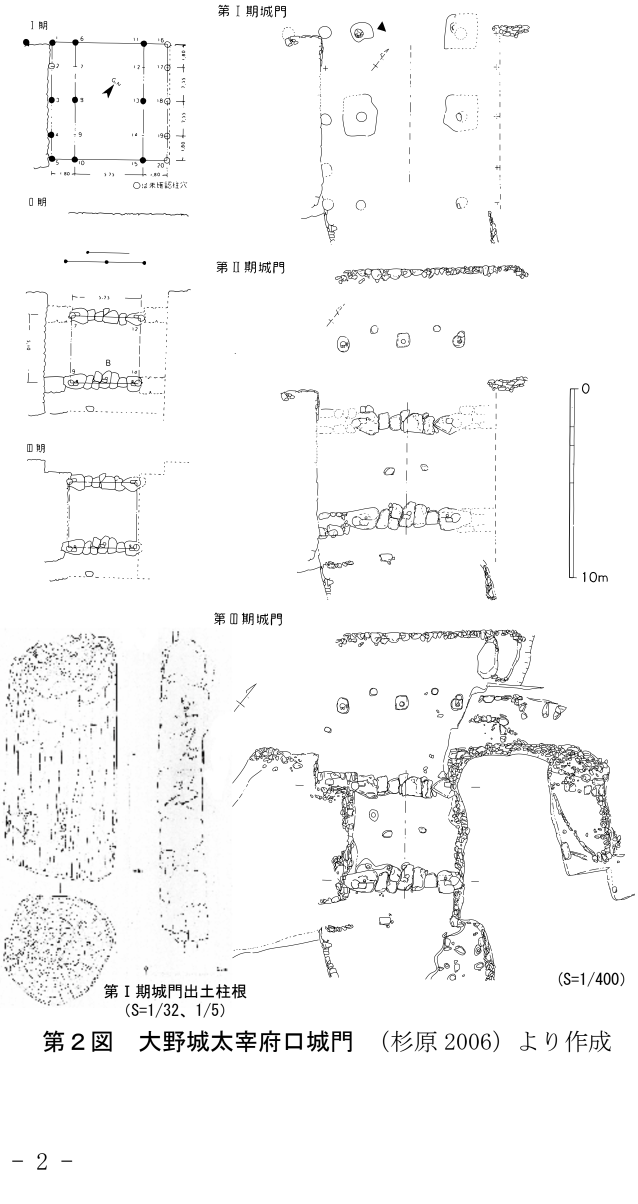
第1図　日本の古代山城の分布

積を持つが、本格的な発掘調査が行われる以前は、文献、遺跡の立地、残っていた遺構などからアプローチし、遺跡の性格付け（山城 or 神域）、分類や分布論、つくられた契機や時期などに言及したものが多数であった。1963 年のおつぼ山神籠石、石城山神籠石の発掘調査で、「神籠石論争」は決着し、1990 年代頃からは史跡指定や整備に伴う調査が徐々に増え、現在は個々の遺跡の様相も徐々に解明されつつある。

山城は広大な面積をもつことから、その範囲を確定させるため城壁ラインの調査は調査初期に及ぶことが多くあり、併せて城門も調査対象とされてきた。上述の発掘黎明期にもおつぼ山神籠石東門〔1963 年〕、同南門〔1963 年〕、石城山神籠石北門〔1963 年〕、同東門〔1964 年〕、帯隈山神籠石北門〔1964 年〕の調査が行われている（佐賀県教委 1965・1967、文化財保護委員会 1963・1964）。

本格的な研究の端緒となったのは葛原克人氏の研究である。1981 年、葛原氏は城門構造の変遷について「掘立柱建物→虎口状石積構造→軸受門礎→円柱座付門礎」という流れを想定した（葛原 1981）。その後、論を発展させ八段階の変遷案を提示した（葛原 1994）。しかしながら以上の変遷案はほとんど表面観察によって示されたものであり、発掘調査など考古学的成果から個々の遺構を吟味し検討したものではなかった。なお葛原氏は、2002 年に後述する鬼ノ城の調査成果を受け、尺度論からの検討も行っている（葛原 2002）。

665 年に築城記事がみられる大野城では、長沼賢海氏や鏡山猛氏らの調査により太宰府口、坂本口、水城口、宇美口の 4 箇所の城門が古くから知られていた（長沼 1931、鏡山 1968）。そのうち 1985 ～ 88 年にかけて行われた太宰府口城門の発掘調査では、城門建物の立替（掘立柱城門→礎石立城門）が明らかにされた（第 2 図）（福岡県教育委員会 1991、横田 1993 ほか）。同様の変遷は水城西門〔1994 ～ 99 年〕（九歴 2009）や金田城ビングシ門〔1993 年〕（美津島町教育委員会 2000）でも確認されている。なお太宰府口城門の調査では創建期の掘立柱城門の柱穴の 1 つよりコウヤマキ（高野槙）の柱根が出土しており、年輪年代測定から木材の伐採年代は「648 年＋α」という結果が示されている（奈文研 1990）。近年実施された X 線 CT スキャンを用いた再調査でも、「650 年」とほぼ同様の測定結果が出ている（赤司・光谷 2012）。



第２図　大野城太宰府口城門　（杉原 2006）より作成

1991 年、向井一雄氏は朝鮮式山城と

神籠石系山城について外郭構造と選地形態を検討し、五類型の分類試案を示した。その中で城門についていくつか重要な点を指摘している。まず立地について、「水門部の横に設けられる場合と尾根の鞍部、突出部など外郭線上の地形変異部に設ける場合にわけらえる」とする。また唐居敷の検討から九州では円柱を、瀬戸内沿岸では角柱を使用するという地域性について言及した（向井 1991）。

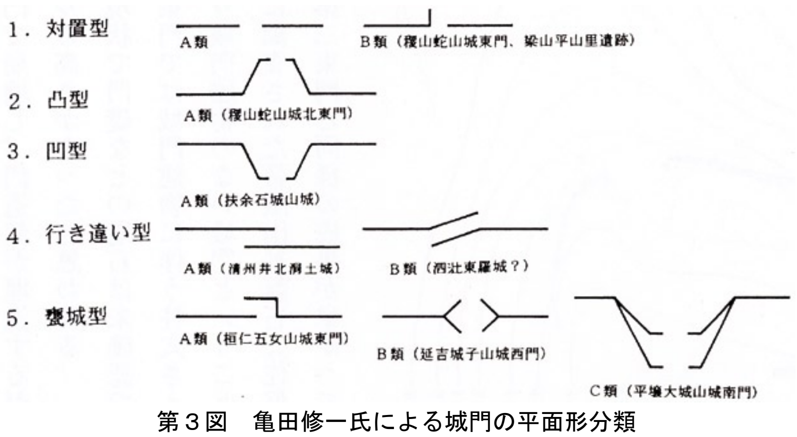
1993 年、成周鐸、車勇杰の両氏は、大野城など朝鮮式山城の城門は、５～６世紀の朝鮮古代山城の城門（三年山城西門、平壌城城門）の型式に基礎をおき、朝鮮の７世紀代の城門の変形（蛇山城東門）とともに日本でも一度変形した様式が流入したと考えた。日本の古代山城の原形は朝鮮半島にあるが、はじめて具体的に城門構造を比較し系譜関係を明らかにしようとした点は、その後の研究に示唆するところが大きい（成・車 1993）。

1999 年には向井氏が、古代山城に限らず、寺院や官衙遺跡の唐居敷（門礎）を集成（計 105 例）し、①軸摺穴、②方立、③刳り形・柱座、④蹴放の諸属性の検討からその変遷を検討した。石製唐居敷が古代山城で多くみられる理由として「扉部の防御、防火という側面もあるが、７世紀という建築技術における日本化が進展する直前の時代様式による」と考え、古代山城で石製唐居敷が確認されていない遺跡については木製唐居敷（礎板）を使用した可能性を示唆された（向井 1999）。向井氏はその後も古代山城全体の研究をリードし続け、城門遺構についても、城門とそれに付随する土塁や石塁などの防御施設を一体的に捉える、中世城館の調査でよく用いられる「縄張」の概念を古代山城研究に採り入れて研究を深化させている（向井 2001・2004・2009 など）。

先述したようにこの頃は史跡指定や整備に伴う調査が盛んになり始めた頃である。城門遺構の調査で特筆すべき事例は岡山県の鬼ノ城で東西南北の 4 箇所の城門が発掘調査〔1994 ～ 2001・06 年〕されたことで、そのすべてが唐居敷を添えた掘立柱城門で石敷きの門道が確認されている（総社市教委 2005・2006、村上 2010 など）。この他にも鞠智城深迫門〔1994・2006 ～ 08 年〕、同堀切門〔1998 ～ 2002 年〕、金田城二ノ城戸城門〔1999・2004 ～ 07 年〕、御所ヶ谷神籠石第二東門〔1998 ～ 2001・2013 年〕がある（熊本県教委 2012、対馬市教委 2011、美津島町教委 2003、行橋市教委 2006・2014 など）。

2002 年、亀田修一氏は朝鮮の古代山城の城門を、①城壁との関係、②門自体の構造、③位置の３つの視点で検討し、①に関して平面形を第３図に示すよう、対置型、凸型、凹型、行き違い型、甕城型の５つに分類した（亀田 2002）。

翌年、筆者は城門建物が掘立柱構造または礎石立構造かという点に着目し、八類型に分類し、その変遷案を提示した。ここで示した変遷案には、個々の類型の上限、下限を検討した上で、一定の暦年代を付与した点に意義があると考える（山口 2003）。



第３図　亀田修一氏による城門の平面形分類
（亀田 2002）より作成

大野城では 2003 年 7 月 19 日の豪雨災害の復旧工事

に伴う発掘調査が多数行われ、新たに観世音口、原口、北石垣、小石垣の４箇所の城門が発見された。このような状況の中、1806年（文化三）に大野城を描いた絵図「太宰府旧蹟全図北図」（太宰府市指定文化財）が再注目され、水城口や坂本口、小石垣城門などの位置に「門ノ石スエ」と記されていることが分かった[註３]。一方で、城門を確認していなかった北西側にも「クロカ子岩門ノ石スエ」の記述を確認し、現地の踏査で石製唐居敷を発見した。この城門は絵図や近世地誌類の記録から「クロガネ岩城門」と名付けられ、大野城の城門遺構は計９箇所が知られることとなった。個々の調査概要は後述するが、この一連の調査で最も特筆すべきなのは、小石垣城門で発見された石製唐居敷に門扉の鉄製軸摺金具が軸摺穴にはまった状態で出土したことである。軸摺金具は重さ約12.8kgで、理化学的分析より砂鉄由来と鉄鉱石由来の２種の銑鉄を原料とする鋳造品で、国内で作られた可能性が指摘されている（九歴 2008）。これについては後述する調査担当者である小澤佳憲氏の一連の研究（小澤 2008など）があるほか、山田隆文氏がその構造を詳細に観察し、朝鮮半島や大陸の出土例との比較検討を行って研究を深化させている（山田 2011）[註４]。

2006年、杉原敏之氏は大野城太宰府口城門の第Ⅰ期城門から出土したコウヤマキ材の柱根に「孚石部」と刻書があることを指摘し、大野城築造に参画した部姓氏族と解釈した（図２）（杉原 2006）。これに対して八木充氏は「部」を「都」（津）と読み、用材を積み出した海港を記したものと推測し、具体的には和歌山県有田郡湯浅町（古代の紀伊国安提郡温笠郷）にある浮石を比定地とした（八木 2014）。先述のＸ線CTスキャンによる年輪年代は、平城宮出土のコウヤマキの暦年標準パターンを用いて示されたもので、この太宰府口城門出土のコウヤマキとパターンが一致することは平城宮建造に用いたものと同じ原産地で伐採された可能性が高いとする（赤司・光谷 2012）。この赤司氏らの研究成果は八木氏の見解と近似するものといえよう。

2009年には第13回の古代官衙・集落研究会が「官衙と門」をテーマに行われた。この中で宮田浩之氏が西海道の官衙の門に言及する中で古代山城の城門にも触れている（宮田 2010）。

2012年、稲田孝司氏は古代山城の総論を著した。論述する中で核としたのは鬼ノ城の一連の調査成果である。東西南北の４箇所の城門が構成する各属性を多角的に分析し、その類似や相違から「西門→南門→北門→東門」の順で営造されたことを示した。この検討等を軸とし、西日本古代山城の全体を俯瞰し、分類及び編年試案を提示した。この中でも「城門石製親柱刳込唐居敷の由来」など城門研究にとって重要な視点にも言及する。そして古代山城が機能した７世紀後半の技術、軍事、政治について論述した（稲田 2012）。

2014年には小澤佳憲氏が、「はじめに」で触れた熊本県主催の鞠智城の推進事業の１つである「特別研究」で、石製唐居敷について考察を行っている。氏は唐居敷の最も基本的な属性である軸摺穴の形状に着目し、主題となる鞠智城の石製唐居敷を詳細に観察し、その使用方法に言及する。また同様に他の古代山城や都城等出土の唐居敷も検討を行い、軸摺穴の形状に主眼を置いて唐居敷の類型化を行い、基本型式として「半円形の主柱刳込と方立穴、平面円形の軸摺穴を持つタイプ」の「大野城Ⅰ型」と「主柱刳込が半円形」で、「方立穴を伴い」、「軸摺穴が平面方形のタイプ」の「大野城Ⅱ型」を設定した。そしてⅠ型とⅡ型の関係を、「大野城Ⅰ型は、七世紀中葉に出現して七世紀第三四半期にかけて使用されるとともに、派生類型を多く生み出している。七世紀第四四半期の類例は見られな

いが八世紀初頭には主柱用加工が礎石建物に適合するよう改変されている。一方大野城Ⅱ型は、派生形式である太宰府口Ⅱ期例が築城時に採用されたⅠ期例の後続形式として採用されていることから、Ⅰ型に後出する形式である可能性がある」とし、時期差とみている。そして「八世紀初頭以降は急速に大野城Ⅱ型系統の唐居敷は使用されなくなり、大野城Ⅰ型の後継形式が様々に変化しながら用いられる」とした（小澤 2014a）。また小澤氏は同年、佐賀県基肄城の東北門に残る石製唐居敷の詳細な観察を行い、使用されていた軸受金具の構造について検討を行っている（小澤 2014b）。また近年は大野城の城門を中心に、上記の成果を理解しやすく簡潔にまとめている（小澤 2015）。

今世紀に入り、発掘調査された城門遺構については次章で述べたい。

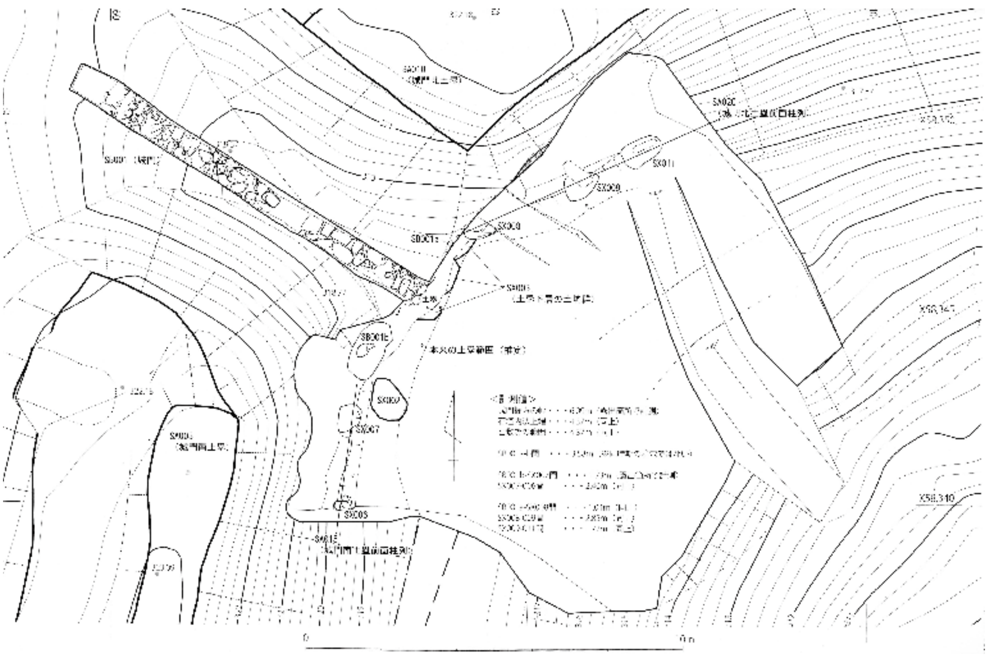
２．近年発掘調査された城門遺構

大野城では先述のように 2003 年の豪雨災害の復旧工事等に伴って新たに観世音口、原口、北石垣、小石垣、クロガネ岩の５箇所の城門が発見されるに至り、小石垣城門を除く４箇所の城門の発掘調査が行われている。

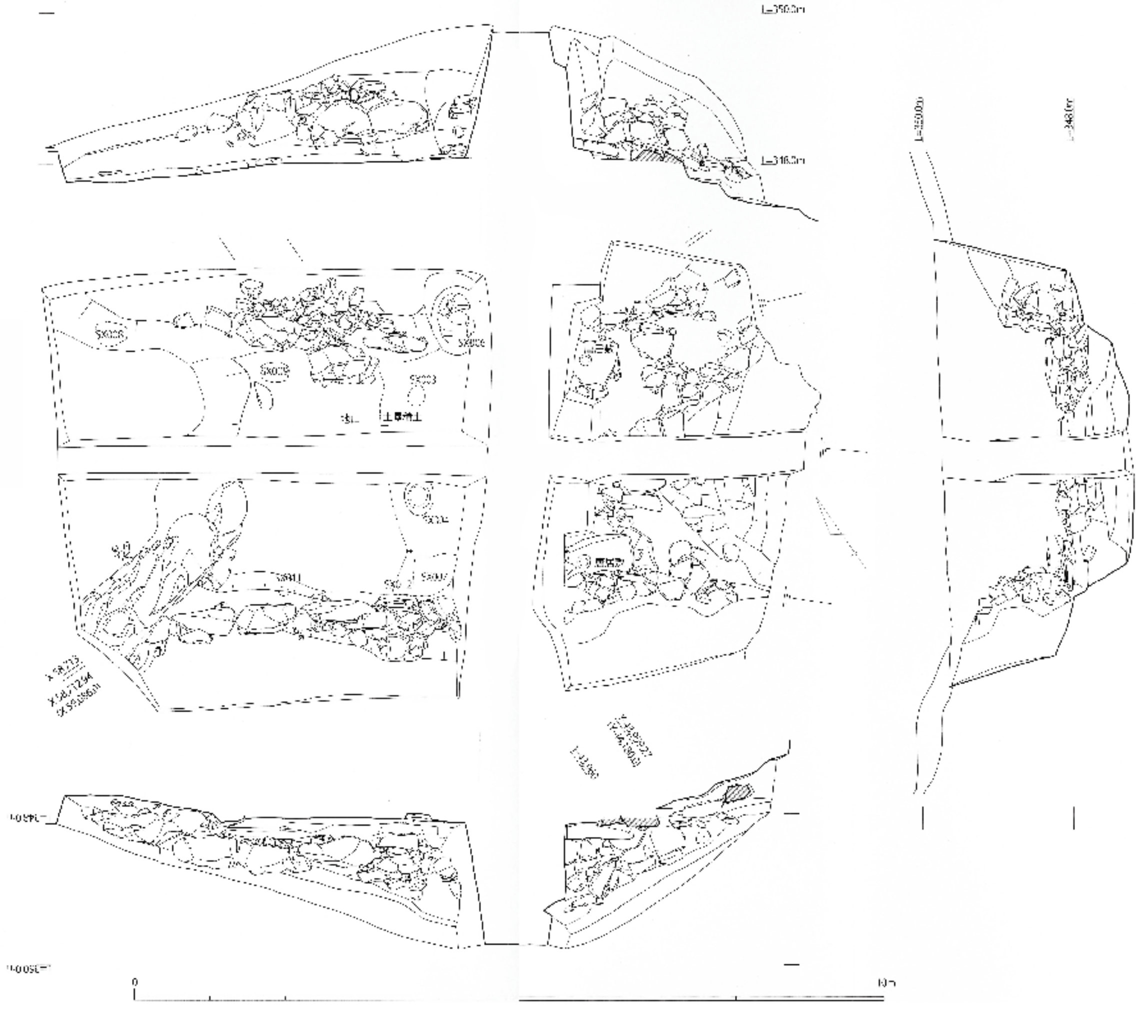
観世音口城門は南側の複郭土塁の外郭南側に位置する（第４図）。災害復旧に伴い太宰府市教育委員会が 2007 ～ 08 年にかけて調査を行った。調査は崩落部法面での土層断面観察、門道中央部に設定した長細いトレンチで行った。結果、城門は少なくとも二時期の差があることが分かった。新しい時期の城門（SB001 新）は石敷きの門道を持ち、壁面は石垣となる。城内から城門へと下る箇所に 10 段の石階段（比高差 1.4m）を設ける。門道部は石階段を含めて長さ 9.55m 以上、幅約 4.5m に復元できる。また崩落部法面の南壁に沿った位置で、直径 1.6m 前後の掘方を持つ柱穴を確認した。柱痕は径 30 ～ 40cm 程度である。古い時期の城門（SB001 古）は、城門築造の掘り込みを崩落部法面で土層確認したほか、新しい時期の城門の石敷下部より柱穴を確認し、芯々間は約 3.6m に復元できる。必要最小限の調査であったため、構造はやや不明確であるが、現状の地形より懸門であったと想定される（太宰府市教委 2015、福岡県教委 2010）。

原口城門は城壁ラインの南東部に位置する（第４図）。災害復旧に伴い太宰府市教育委員会が 2004 ～ 05 年にかけて調査を行った。その結果、掘立柱城門から瓦葺きの礎石立城門への立替えが明らかになった。現状で切り通しの幅は約 3.3m で、これが新しい時期の城門の門道幅となる。大野城の他の城門と比べ最も小型である。壁面は比較的簡易な石積み（長さ約 8.0m、高さ 1.15m）をし、その石積みに接して一対の縁に円弧をもつ石製唐居敷を城門建物の礎石として用いている。この唐居敷には鉄錆痕を残す軸摺穴があり、芯々間は 2.7m を測る。埋土中に縄目瓦片を含むため城門建物は瓦葺きであったと考えられる。また門道部には部分的に石敷きが残っていた。古い時期の城門は主柱穴１対を検出した。南側の柱穴には直上に石積みが乗っているため検出のみに留まったが、芯々間で約 3.6m を測り、新しい時期の城門より門道幅はわずかに広くなる。主柱穴には先述の石製唐居敷を伴うものと考えられる。城外側はやや急峻な斜面となっており、懸門構造であったであろう。なお「太宰府旧蹟全図北図」には原口城門の位置に「大人足形」と記されており、大きく窪んだ地形が江戸時代後期にも見られたことが推測される（太宰府市教委 2015、福岡県教委 2010）。

北石垣城門は北側の複郭土塁の内郭中央に位置する（第５図）。「北石垣」として２箇所



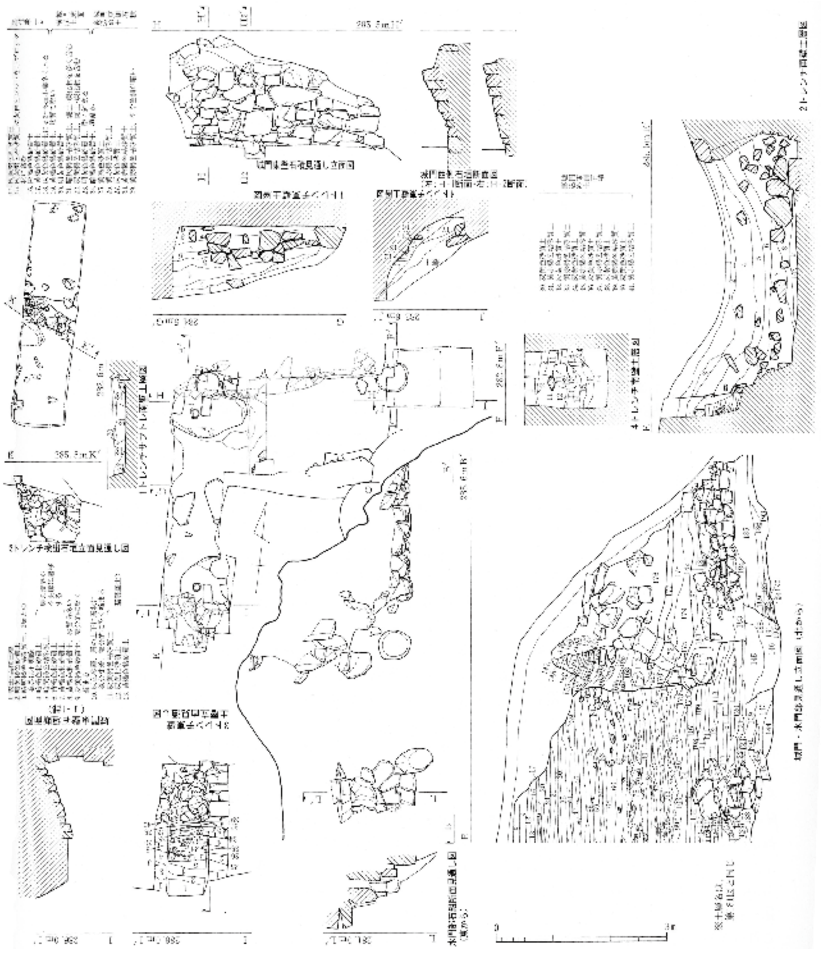
大野城観世音口城門（S=1/200）



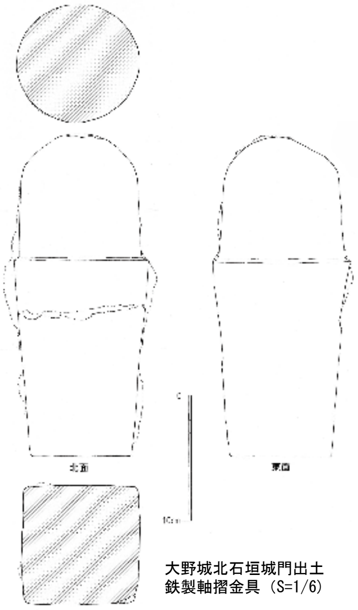
大野城原口城門（S=1/200）

第４図　大野城観世音口城門・原口城門

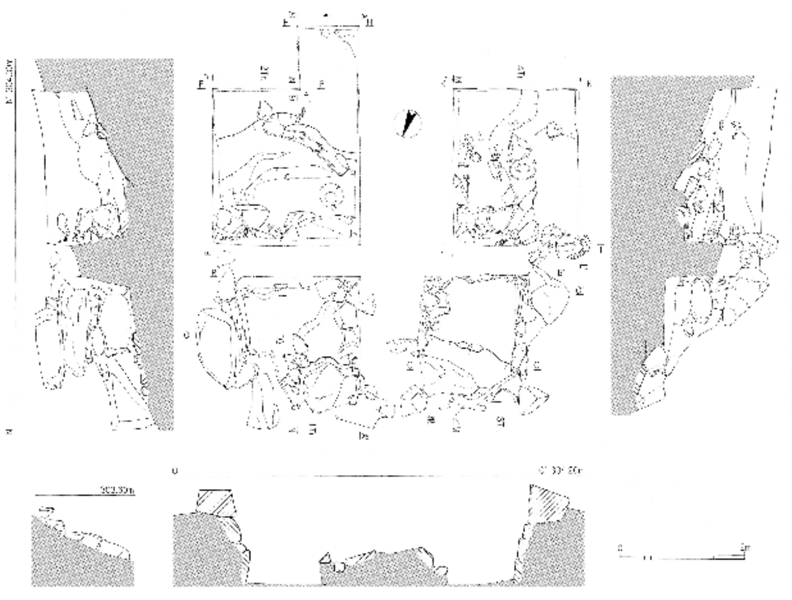
（太宰府市教委 2015）より作成



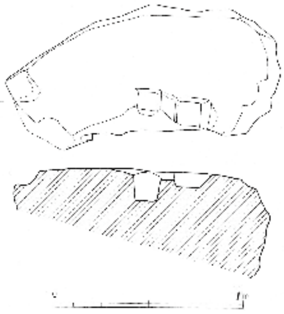
大野城北石垣城門（S=1/100）



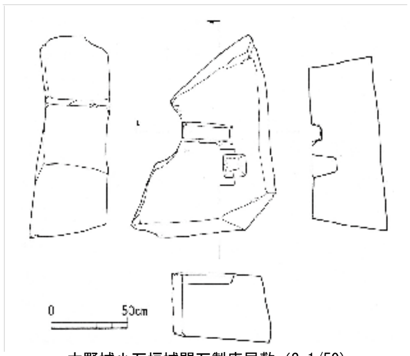
大野城北石垣城門出土
鉄製軸摺金具（S=1/6）



大野城クロガネ岩城門（S=1/120）



大野城クロガネ岩城門石製唐居敷（S=1/50）



大野城小石垣城門石製唐居敷（S=1/50）

第５図　大野城北石垣城門・クロガネ岩城門・小石垣城門　（九歴 2008・2014、福岡県教委 2010）より作成

の石垣が知られていたが、城門はその石垣の東側約 50m にある。災害復旧に伴い九州歴史資料館が 2006 年に発掘調査を行った。調査前は土塁上の平坦面に凹みがあり、そこに石垣のような構造物が認められたため、トレンチ調査を行った結果、城門の側壁の石積み（高さ約 1.5m）であることが分かり、最下面より原位置を留めた石製唐居敷を検出した。唐居敷には円形刳り込みがあり、方立穴、軸摺穴をもつ。前章の研究史でもすでに触れたが、南側の石製唐居敷の軸摺穴では門扉の鉄製軸摺金具がはまった状態で出土した。門道幅は約 4.7m で、主柱穴は径約 50cm、芯々間で約 4.1m を測る。軸摺穴の芯々間は約 3.1m である。登城路と門道との間には高さ約 1.4m の石垣が築かれており、明確な懸門構造といえる。なお前面石垣の脇から一対の柱痕を検出している。芯々間は約 4.7m で主柱の芯々間と約 0.6m の開きがあるが、城門建物の前面柱穴と想定されている。なお出土遺物は鉄製軸摺金具のほかに、扉に使用されたと考えられる鋲留金具や瓦の小片がわずかにある（九歴 2008、福岡県教委 2010）。

クロガネ岩城門は外郭線の北西部に位置する（第 5 図）。前述のように「太宰府旧蹟全図北図」に基づく踏査により 2011 年に発見され、2012 ～ 13 年に九州歴史資料館が調査を行った。トレンチ調査の結果、門道は崩落によって前面が流出するが、長さ約 4 mを残すことが分かった。左右壁面は石積みで現状高約 1.5m を測る。門道幅は約 4.2m である。床面は石敷きと考えられている。後述の唐居敷の原位置など城門建物の痕跡は検出できなかった。城門発見の契機となった石製唐居敷は東側のもので、 6 m 程下方にずり落ちている。主柱が沿う面を欠くためその形状は分からないが、方立穴、軸摺穴を加工してある。軸摺穴には鉄錆が付着する。城門の構造は現状の高低差を考えると懸門構造であったと推定される。特筆すべき遺物に百済系単弁軒丸瓦がある。主城原地区や八ツ波地区から出土例と同笵（020A 型式）で、城門の築造が 7 世紀後半代に遡るものと考えられる。廃絶時期は出土した土器より 9 ～ 10 世紀にかかる頃と推定される（赤司 2012、小澤 2010、九歴 2014a、下原 2014）。

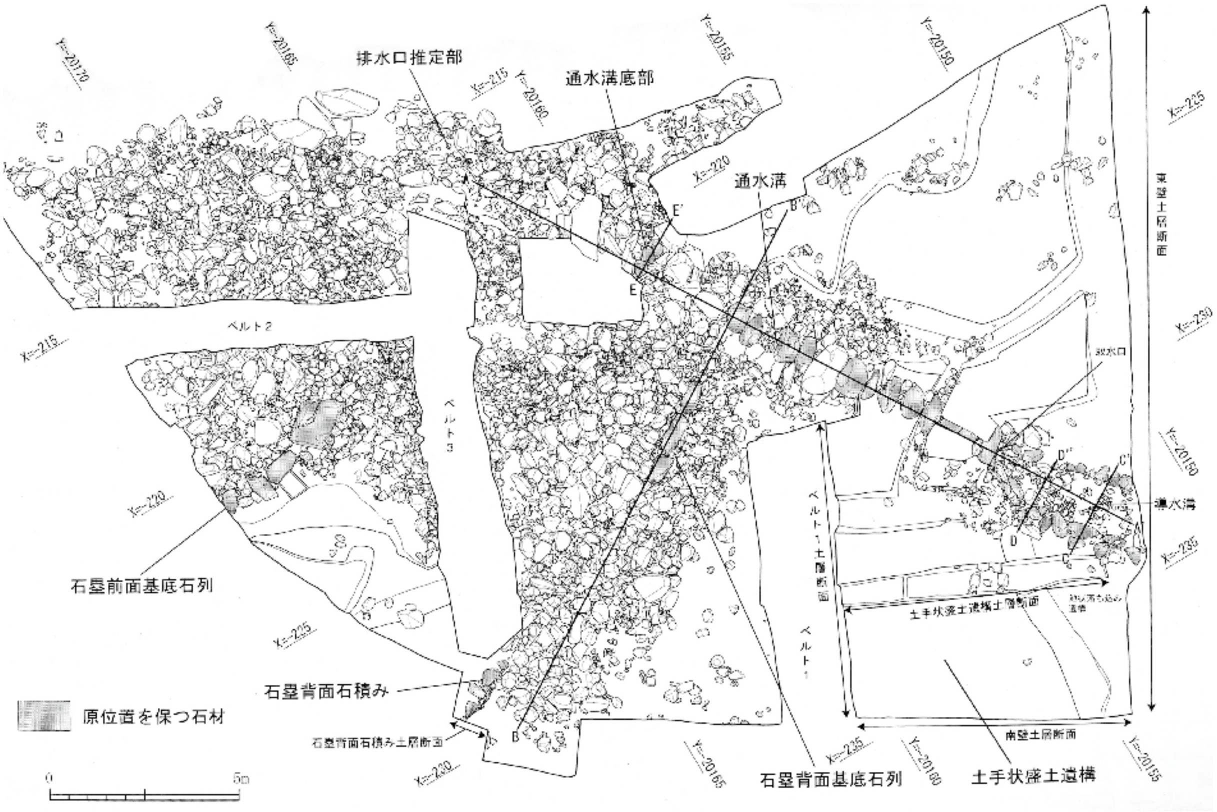
小石垣城門は北側の複郭土塁の内郭東寄りにある。「太宰府旧蹟全図北図」に「門ノ石スエ」と記述があることから城門の存在が想定されていたが、2007 年に石製唐居敷が発見され周知されるに至った。石製唐居敷（第 5 図）には円形刳り込み（主柱の復元径は約 45cm）があり、方立穴、軸摺穴をもつ。現在まで考古学的発掘調査は行われていない。開口部の幅は約 8 mで、現況を窺う限り渓流の氾濫で門道部分はほぼ完全に失われてしまった可能性が高い。水量から比較的大規模な石組み暗渠構造の水門を付随していたものと想定できる（福岡県教委 2010）。

第 6 図　金田城南門
（対馬市教委 2008）より作成

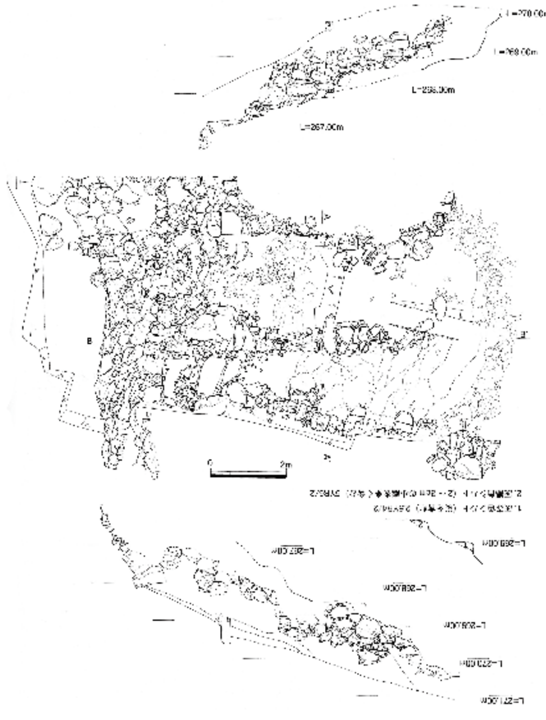
対馬の金田城では以前より城門遺構とされる「城戸」と呼ばれる切通しが３ヶ所知られており、1993 年より始まった史跡整備に伴う発掘調査で新たにビングシ門が発見されるなど遺跡の内容が徐々に明らかになりつつある（東亜考古学会 1953、美津島町教委 2000 など）。2003 年には新たに外郭線南側の近世絵図に「カラメテ」の記述がある地点で礎石立城門が発見され、発掘調査が行われた。「南門」と名付けられたこの遺構の残りは良好で、検出された８つの門礎石はすべて原位置を保っている（第６図）。城門建物は間口１間、奥行３間で、城外側から２つ目の一対の門礎石に扉の軸摺穴を穿つ。軸摺穴には水抜きの溝が加工されている。主柱の芯々間は約 3.2m で、軸摺穴の芯々間は約 2.4m である。奥行きは手前の１間が約 2.0m、奥の２間は約 1.75m ずつを測る。側壁は石積みで、残りの良い箇所は約 2.1m である。床面はすべて石敷きで、前面には西側壁に沿って最大幅 0.9 mの階段が残っている。特質すべきことは城門建物の部分も門道が階段状に築かれていることである。したがって、城門建物の屋根が水平になることを考えると、門柱の長さはそれぞれ異なっていたと推測される。また調査では堰板と考えられる炭化材を検出している。樹種はクスノキで、放射性炭素年代測定で「650 年（交点）」という測定値を得ている。なお石敷きの下は未調査で礎石立城門に先行する建物があったかどうかは分かっていない。（対馬市 2008）。

鞠智城でも史跡整備に伴い深迫門、堀切門が発掘調査され、近年は 1968 年の第１次調査で礎石が発見された池ノ尾門が広く面的に調査されている〔1968・2004 ～ 06・2010 ～ 11 年〕。池ノ尾門は鞠智城の南西域、北西方向に開く浅い谷に位置する（第７図）。西側土塁線と南側土塁線に挟まれた幅 20m の狭い谷で、城内の最低所（標高 90m）にあたる。調査前は谷部が完全に開けており、谷部に設けられたであろう城壁と城門の位置は判然としなかったが、谷部に設定した調査区で崩壊した石塁を検出した。後世の開削や事前崩落によりそのほとんどは崩壊した状況にあるが、一部は基底石が残存し、背面の南西側では４～６段分の石積みを検出した。基底石より石塁幅は約 9.6m と推定されている。総延長も現状の地形から約 12m はあったと考えられる。石塁のやや東寄りでは石塁に直交する暗渠式の通水溝及び取水口を検出した。全長は 16m と推定される。その手前では導水溝を約 4.3m 分確認し、その延長は未調査区へと続く。城門は現在の市道や塩井川にあったと考えられるが、その痕跡は確認できていない（熊本県教委 2012、向井 2014）。

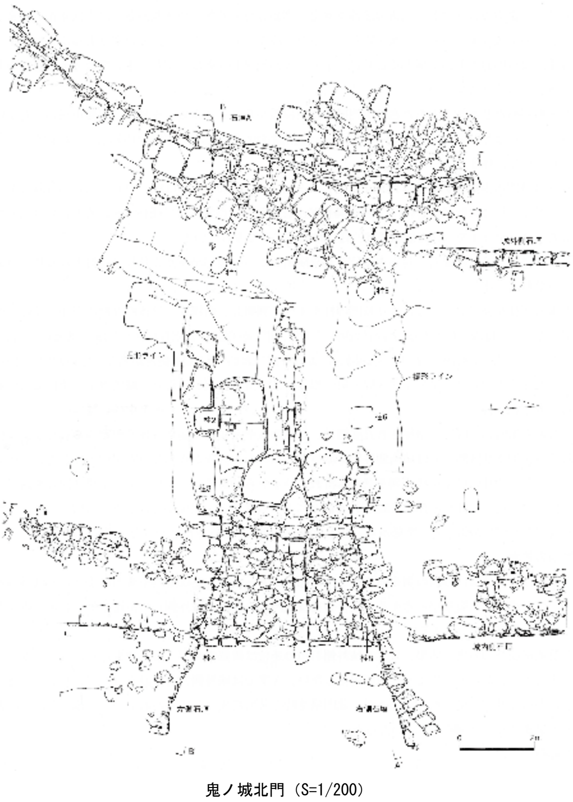
屋嶋城では屋島北嶺と南嶺の間にある浦生石塁が唯一の遺構であり、山頂部は天然の要害として城壁は築かれなかったと考えられていたが、1998 年に屋島南嶺の南西側斜面で石塁が新発見された（平岡 1999）。その北端部に幅４ｍの落ち込みがあり、2001 ～ 02 年に発掘調査を行った結果、新たに城門遺構が発見された（第７図）。門道の幅は約 5.4m で奥行は約 8.0m になる。床面は石敷きで階段状になる。後述の排水溝の状況から城外側の石敷きは流出したと考えられる。両側壁の石積みは緩みや崩落が著しいが、1.2 ～ 1.6m の高さで残存する。門道の中央部には排水溝があり、床面に合わせ３段に段差をつけて造られている。全長 7.0m 前後、幅約 0.5m で、底石はなく板石を立てて側壁とする。一部に蓋石が残存するため、本来は暗渠式であったと考えられる。排水口は検出したが、集水桝を含む取水口は残っていなかった。城門建物は南側壁に沿って一辺 50cm の隅丸方形を呈す柱穴を２基検出した。対応する北壁側でも近年の整備に伴う発掘調査で確認されている（註５）。以上より掘立柱城門であったと考えられるが、城外側の床面が流出しており、そ



鞠智城池ノ尾門（S=1/200）



屋嶋城城門（S=1/200）



鬼ノ城北門（S=1/200）

第７図　鞠智城池ノ尾門、屋嶋城城門、鬼ノ城北門
（熊本県教委 2012・高松市教委 2008・総社市 2008）より作成

の規模や上屋構造は明確でない。城門の前面は崩落するが、南側では基底部から約 1.2m 垂直に積み上げげられた石積みを確認した。復元高は２m以上ある。発掘調査事例としては国内初の明確な懸門構造の確認となった。また奥は擂り擂鉢状に岩盤がせり立ち、その上部に列石を用いた土塁を築く内甕城の構造を採り、城門防御を堅固にする（高松市教委 2003・2008、高松市歴史資料館 2013、山元 2009）。

御所ヶ谷神籠石では 1993 年から現在に至るまで、史跡の追加指定や整備を目的とした発掘調査が継続的に行われている。突出する暗渠式の水門を備えた中門は日本の古代山城を代表する遺構として大変著名であるが、この他に東門、第二東門、西門、第二西門、南門、第二南門の６箇所の城門遺構が知られている（山口 2006）。2013 年には継続して発掘調査を行っていた第二東門をほぼ完掘したが、以前の調査でも明確でなかった城門建物の痕跡は確認できなかった。以前の調査で７世紀第３四半期の所産と考えられる須恵器長頸壺が出土していたが、新たに７世紀前後の土師器や須恵器の小片が出土している。この他に 2011 ～ 12 年に西門の石塁背面に沿ってトレンチ調査を行っている（行橋市教委 2014）。

鬼ノ城は 1994 年の東門を皮切りに東西南北の４箇所の城門が調査されているが、北門は 2001 年にほぼ全面の発掘調査をし、2006 年に整備に伴う補足調査を行った。北門は城壁線の北部、城内２番目の標高（374m）をもつ峰の南斜面裾（第 91･92 塁状区間）に位置する（第７図）。正面には深い谷が面しており、背後の谷筋を下っていけば第４水門にたどり着く。門道は幅 4.0m、奥行約 9.65 mで、一部、扉部の唐居敷が動き床面の敷石を欠くが、１間×３間の掘立柱城門を検出した。特異なのは石製唐居敷を据える主柱は角柱を用い、残り３対６本の控柱は円柱であることで、城外より控柱１対、主柱１対、控柱１対、控柱１対の配置をとる。唐居敷には一辺 50 ～ 55cm の方形刳り込みがあり、方立穴、軸摺穴、蹴放をもつ。控柱は径 30 ～ 40cm の円柱である。主柱の芯々間は約 4.0m で、軸摺穴の芯々間は約 2.95m と推定される。扉は内開きである。床面の石敷きで、手前の２間分は大型の花崗岩を敷くが、奥の１間分は小型のアプライトを敷石とする。門道部中央には延長 11m 余りを測る一部暗渠式の排水溝が付設されている。側壁は現状では版築土塁だが、板塀の痕跡を確認している。城内側の控柱から奥は石垣となる。多くの石材が転落していたが、南北石垣ともに高さ 1.9m 程を残す。門道は城外側とは約 1.7 ～ 2.3m の段差があり、懸門構造であったと考えられる。またその外側斜面にも３段３列の石垣を築いており、北門は城の背面にあるにも関わらず、他の城門と比較しても堅固な構造であることが明らかになった（総社市教委 2005・2008）。

愛媛県の永納山城も 2002 年から史跡指定を目指した発掘調査が開始され、2005 年に国史跡に指定された。指定後の 2006 ～ 08 年にかけて行った調査では３箇所の城門推定地を発掘したが、いずれも確認には至らなかった。一方、外郭線北側の現在 JR 予讃線が通過する谷部の水門推定地の調査では、谷に並行する列石とそれを据えるための造成土、そこに掘り込まれた柱穴を確認し、遺構の位置関係や他の古代山城の例から、水門に付随する城門の痕跡である可能性が高いと報告がなされている（西条市教委 2009）。

３．整備された城門遺構

古代山城の城門遺構の整備で先駆的事例として大野城太宰府口城門を挙げられる。研究史でも触れたように、1985 ～ 88 年の発掘調査で城門建物の立替（掘立柱城門→礎石立

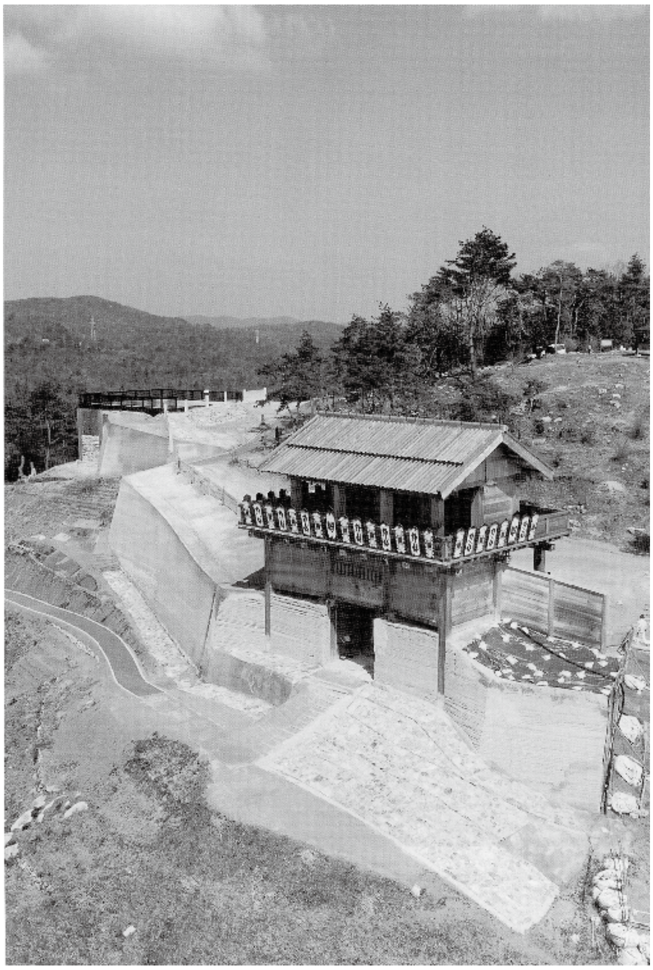
城門）が明らかにされ、1994 ～ 98 年にかけて行った環境整備により、第Ⅲ期の状態に復された（城門建物は未復元）（福岡県教委 2006)。なお 2003 年の豪雨で東側の石垣が崩落したが、再整備が行われ現在は復旧している（福岡県教委 2010)。

城門の整備が最も進んでいるのは岡山県の鬼ノ城である。同じく研究史で触れたが、東西南北の 4 箇所の城門の主要部分が 1994 ～ 2001 年にかけて発掘調査され、そのすべてで石敷きの門道をもつ掘立柱城門が確認されている。史跡整備は 2000 年からの 10 箇年を第Ⅰ期の環境整備事業とし、角楼から西門、高石垣を経て、第 0 水門に至る約 140 m の区間を「遺構復元地区」に指定し、重点的に復元整備を行った。その結果、西門の整備では城門建物も復元されるに至った（第 8 図)。現在、麓からもその威容を望むことができ、鬼ノ城のランドマークの役割を果たしている。以下では西門の整備状況について詳しく触れたい。

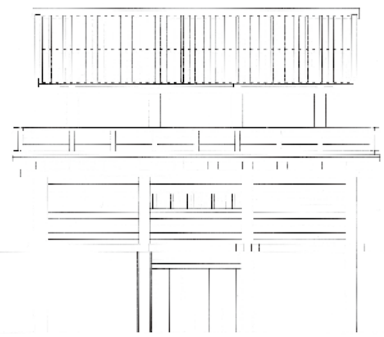
西門は 1996 年と 98 年の 2 次にわたり発掘調査が行われた。鬼城山山頂（標高 397 m）より南西方向に 60m 程緩く下った地点にあたり、尾根が小さく南へ張り出した地形に選地する。城門建物は 3 間× 4 間の八脚門で、間口 12.3m、奥行 8.25m を測る。掘立柱構造ですべて角柱を用いる。門道は真ん中の 1 間分（幅 4.1m）で、外側の 6 本の柱は版築土塁中に埋め込まれる。門道は石敷きで奥行は約 7.0m あり、その中間に石製唐居敷が据えられる。唐居敷には一辺 60cm の方形刳り込みがあり、方立穴、軸摺穴、蹴放をもつ。主柱の芯々間は約 4.1m で、軸摺穴の芯々間は約 3.0m を測る。門扉は内開きである。それより奥は城内と約 1 mの高低差があるため、奥行 4.5m、4 段の上り階段が築かれている。両側壁は現状では版築土塁であるが、板塀であったと考えられる。城内側の控柱から粗い石積みの壁面に変わり、そのまま内側列石に接続する。門道は城外側へは緩やかにスロープで下っており、他の城門が懸門構造を採るのに対し異なっている。また階段を上り城内へ入ったところで 3 m間隔の 4 本の柱穴列を検出しており、目隠し塀と解釈されている。なお調査所見より、城門建物の建て替えは無いと考えられる。出土遺物は土師器や須恵器があり、時代は 7 世紀末から 8 世紀初頭のものが中心である（総社市教委 1997・1998・1999)。

さて西門の発掘調査の概略を述べたが、調査後は遺構の保護処置をした後に仮設の門柱を建て、門道の側壁には板塀を設置するなど城門の規模が視覚的に理解しやすいように仮整備を行っていた。2003 年には復元整備に伴う詰めの調査として、城門建物の復元に伴い計 12 本の門柱を新規に立てる必要があったため各柱痕を完掘した。最も柱痕の残存が良好な柱では、柱の埋め代が深さ 3.7 ～ 4.0m を測り地山に達していた。また西門の築造を示す大きな掘方を面的に検出した。掘方は上面幅 20.5m、底部幅 16.0m で、高さは北側で 2.7 ～ 3.2m を測る。土層の切り合い関係から、版築土塁が先行して築かれ、城門の建築工事が本格化したことが判明した（総社市教委 2005)。

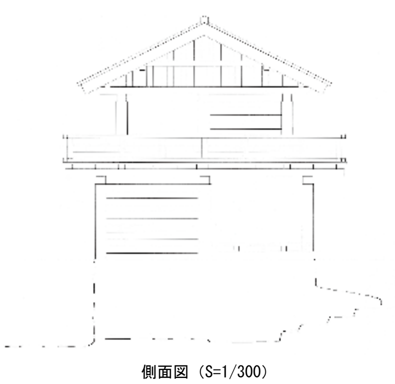
城門建物の復元にあたっては、もちろん上述の発掘成果に基づいて行われることになるが、2002 年度に策定された「環境整備基本計画」では西門は上屋を含めた実物大復元を行うことが示された。城門建物については、すでに調査時点で払田柵の整備事例等を参考に 1/50 の立体模型を完成させていたが、1999 年に建築を専門とする濵島正士氏が整備委員会に加わることでより具体的な復元案が示された。その内容は以下の 4 点に集約される。



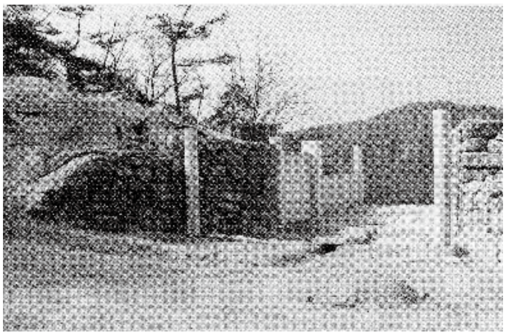
復元された西門



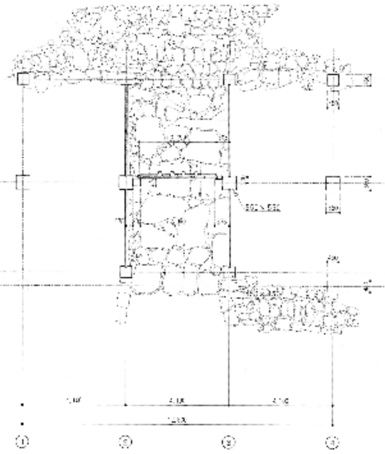
正面図（S=1/300）



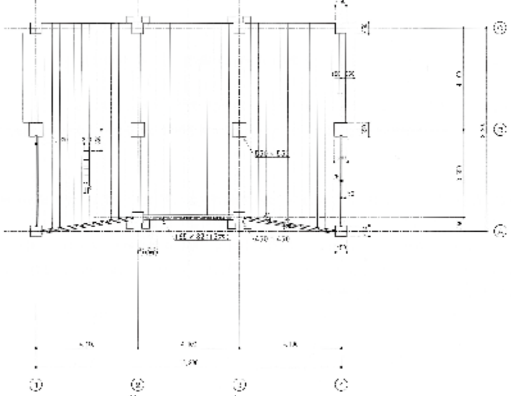
側面図（S=1/300）



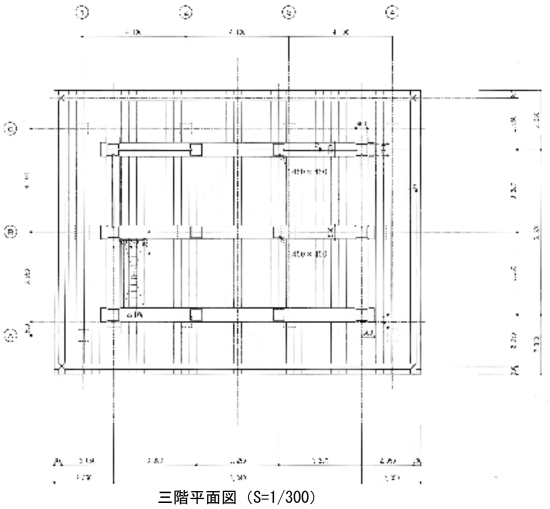
復元された北門



一階平面図（S=1/300）



二階平面図（S=1/300）



三階平面図（S=1/300）

第８図　鬼ノ城西門・北門の整備状況（総社市教委 2011）より作成

・大きな城壁に構えられた門で、左右の城壁上を繋ぐ機能もあったと考えられることから、重層構造の二重門、楼門、櫓門の形式が想定される。このうち櫓門は近世の遺例しかなく、二重門では一階部分の屋根の収まりが悪いため、楼門とするのが妥当である。
・大規模で、正門と推定されるため屋根は当然あったと考えられる。瓦がないため板葺であるが、防火面を考慮すると厚板の縦板葺が想定される。屋根の形式は厚板でも納まりに無理がない切妻造が妥当である。
・山城の門は堅固な建築であり、都城の門とは異なり組物などは用いない形式であったと考えられる。柱が方柱であることはその傍証となる。
・日本の重層建築は、遺例をみる限り柱を管柱とした積み重ね式が一般的である。しかし、柱の根入れの深さより、一階の柱を管柱にすることはできない。一方、二階までの通し柱では、一階部分は構造上問題ないが、二階両脇間装置の納まりなど、構造上無理がある。

この復元案を叩き台にし、整備委員会で協議を重ねた結果、以下の結論を得た。
・柱が太く、根入れが２m 以上あることから三層構造の楼門とする。
・一階は出入口、二階は城壁上の連絡口、三階は見張り及び攻撃の場である。
・屋根は厚板の縦板葺きで切妻造の形式を採る。
・一、二階は通し柱、三階は管柱とする。
・二階は吹き放し、三階は回廊を付け高欄をめぐらし全面吹き放しとする。

協議での最大の争点は屋根の有無であった。これについては最後まで確証の無いままであったが、管理上の問題もあり、屋根をもつ城門建物を復元することとなった。ただ、これまでの協議の経緯もあることから、ガイダンス施設では両案の城門模型を展示している。なお三階には盾を設置する。鬼ノ城での出土例は無いが、山城という防御施設であることを考えると、盾の設置は当然想定できることである。復元に当たっては平城京出土の「隼人の盾」を参考とし、アレンジを加え３種作製した。盾は本来的には高欄の内側に置くべきものだが、折角の文様が隠れてしまうので、意図的に外側に設置した。復元工事は 2003 年３月から着手し、11 月に竣工した（総社市教委 2011、濵島 2011）。

この他、鬼ノ城では「環境整備基本計画」の中で東門、南門、北門は「遺構表示地区」に設定され、遺跡の保全と活用を図りながら、豊かな自然の中で歴史を身近に感じ学べる空間として、城門遺構の状態を最大限に活かした整備の指針が示されている。第Ⅰ期事業として 2010 年までに整備を終えている北門を例に採ると、2003 年の調査後に仮整備を行い、2006 年に表示整備を行った（第８図）。主な整備内容は次の通りである（総社市教委 2011）。
・動いていた石製唐居敷を原位置に戻し、欠失した敷石等を補い、門道を旧状に復元した。
・城外側の壁面は版築土塁で復元し、懸門構造とした。
・門柱は８本の柱穴位置に表示柱を設置し、長さを床面から 2.2m の同じ高さで揃えた。
・側壁は版築土塁が露出していたが、本来あったと考えられる板塀を復元した。
・門道奥の石垣は解体し、欠失部を補い復元修理した。
・門道から城外への園路として木製スロープを設置した。
・説明板を設置した。

この他、金田城では二ノ城戸城門の整備を 2004 ～ 07 年にかけて行っている。門道床面は土嚢で養生し、蛇籠で覆って保護しており見学はできないが、木製デッキや階段で見

学路を整備し、説明板を設置している（対馬市 2011）[註６]。また、屋嶋城では 2007 年より城門周辺の整備事業を継続的に行っている。城門建物の復元は行っていないが、城門の北側奥にある甕城や遊歩道を整備し、2016 年の春より一般公開を開始する予定である[註７][註８]。

４．城門研究の現状と課題

述べてきたように、古代山城の城門については一昔前と比較し、発掘調査事例が増え、近年では整備を終えた事例も出てきている。それに併行して研究も深化してきた。最後に筆者が古代山城の城門について日頃考えていることを項目立てし、まとめとしたい。

城門とは何か

城門と門の違いは何か。門は古代の都城や寺院では、平城宮の朱雀門のように巨大な建造物で、権威を象徴するモニュメントとしての役割を担っていたと考えられる事例もあるが、その基本的な機能は単に施設への「出入り口」である。よって城門とは軍事的構造物である城郭の出入り口であることから、防御的側面を備えた門と考えられる。基本的には出入り口は狭く造られ、一間一戸の構造であったと考えられる（坂井 2010）。

分布・選地

城門は城の中にどれくらい造られたのか。外郭線が明確な鬼ノ城では４箇所が知られ、未調査ではあるが基肄城でも４箇所、鞠智城は城壁線の南側に３箇所あり、北側に１箇所の想定地がある。城門がもつ防御的側面を考えると３～４箇所が適当であろう。しかしながら、御所ヶ谷神籠石では約３km の城壁線に７箇所の城門がある。大野城では再三述べてきたように現在９箇所の城門が知られるようになったが、小澤佳憲氏はそのすべてが築城当初（665 年）よりあったものではなく、対外的緊張が緩和し城としての機能が薄れていった７世紀後半に、城内（倉庫群）を行き来するためのルートとして新たに築いたもの（北石垣城門・クロガネ岩城門・小石垣城門）もあると考えている（小澤 2015）。

城門が築かれた場所は、以前より向井一雄氏が指摘するように大きく２つのパターンがある（向井 1991）。まず１つは谷部を塞ぐ位置に水門とセットで築かれる城門で、御所ヶ谷神籠石中門や基肄城南門がその代表格である。包谷式山城では正面の登城口に造られることが多く、その場合は正門と考えられる。もう１つのパターンは尾根の鞍部、突出部など外郭線上の地形変異部に設ける場合である。

発掘調査から何が分かるか

城門建物に関しては柱の形状、寸法、配置（平面プラン）など下部の構造が分かる。遺構の切り合いからは建物立替の有無を判断することもできる。また地業の有無など築造方法にも言及できることもある。鬼ノ城西門では築造を示す大きな掘方を面的に検出した。土層より版築土塁が先行して築かれ､城門の建築工事が本格化したことが判明している（総社市教委 2005）。土師器や須恵器などの出土遺物からは城門の機能した時間を考えることができる（山口 2003）。また炭化材が出土すれば、樹種同定や放射性炭素測定年代など理化学的分析を行うことができ、用材の樹種や年代などが分かることもある。

唐居敷について

門にはたいてい扉がつく。引き戸の場合もあるが、通常は扉が回転運動により開閉される構造をもつ。その回転運動の基礎部分を固定する特徴的な部材に「唐居敷（からいしき・

からいじき)」がある。岡田英男氏は「扉口の柱足元にそわせて置いた盤上の厚板で、これに扉の下方の軸穴をほる」もので、「ほとんど木造で、一枚の厚い盤状の材で作られるが、切石で作られることもある」と定義する（岡田 1984）。筆者は「柱足元にそわせ」とあることから、掘立柱建物に伴うものだけを唐居敷と考えていたが（山口 2003)、岡田氏の概説には「東福寺六波羅門のように親柱の礎石に直接方立の枘穴と扉の軸穴をほる珍しい例」も挙げられていることより、現在は礎石型のものも唐居敷と考えている。唐居敷は「門礎」や「門礎石」など報告者によって様々な呼び方がされており、きちんと用語の統一が図られることが望ましい。なお、鬼ノ城西門や讃岐城山城などでは蹴放段のみを加工した石材があるがこれをどう呼称すればいいのかは検討を要する。

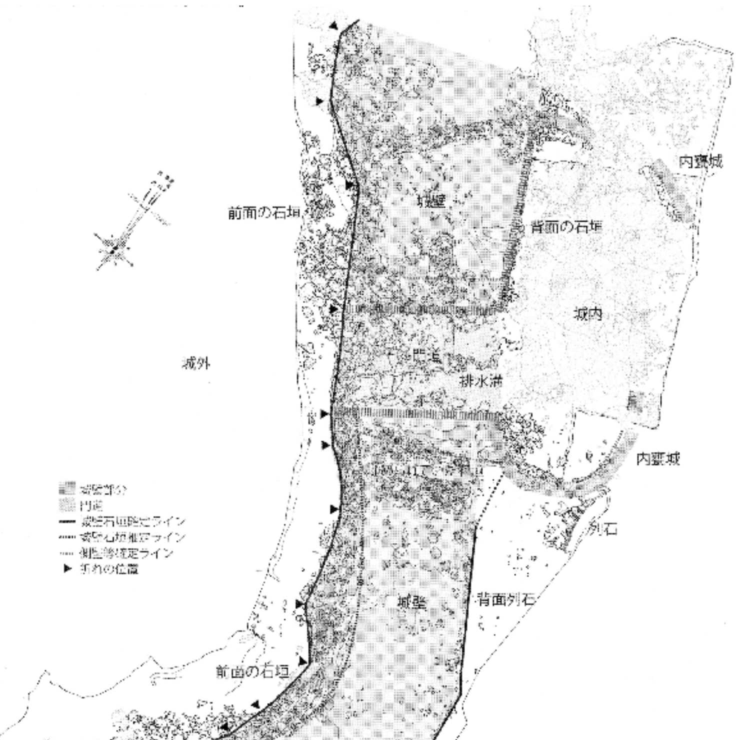
構造・縄張

城門建物の平面プランは様々であるが、間口は基本一間一戸である。柱には円柱と方柱があり、唐居敷の形状から九州＝円柱、瀬戸内＝方柱という地域性はよく指摘される。

門道は通常は高低差がなくほぼ平らであるが、階段状をなす事例（金田城南門、屋嶋城城門）もある。床面は地山成形し整地したもの、石敷きのものと大きく２つの形態に分けられる。暗渠式の排水溝を敷設する事例（屋嶋城城門、鬼ノ城北門）も知られる。

城壁は石塁、土塁を覆う石積、板塀などの調査事例があり、城門部は他の箇所より幅広く造られることが多い。その頂部に板塀を築く事例（大野城太宰府口城門、鬼ノ城西門など）もある。城壁は比高差をもち、ハの字状に城外側に張り出すことが多く、その場合、防御側が攻撃側に対して有利な「見方折れ」の構造となる。また城外と段差を設けた懸門（大野城北石垣城門、屋嶋城城門、鬼ノ城北門など）も調査事例が増えている。

城内側に視点を向けるとやはり防御を意識したと思われる構造が多くある。目隠し塀をもつ事例（大野城太宰府口城門、鬼ノ城西門)、自然地形を遮断装置として利用した事例（鬼ノ城南門)、岩盤を削り残す事例（御所ヶ谷神籠石第二東門、鬼ノ城東門)、土塁を築く事例（御所ヶ谷神籠石東門）などである。門道は直進せずに屈折させるのが一般的で、近接する城壁に雉城などを設けたり、屋嶋城城門にみられる内甕城（第９図）など、虎口防御を堅固にした縄張を採る事例が近年注目されている。城門を単独で考えるのではなく、それに付随する城壁や自



第９図　屋島城城門の縄張（高松市歴史資料館 2013）より作成

然地形など広く面的に捉え、城門が備え持つ防御機能を考えて調査を行うことは重要な視点である。

城門として機能した時間

城門は造られてからどれくらいの時間機能したのか。建物の維持という観点から考えると、大野城の太宰府口城門では掘立柱城門（665 年）から礎石立城門（700 年前後）へと約 40 年で立替が行われており、掘立柱建物は数十年が限度であったと考えられる。鬼ノ城の城門はすべて掘立柱城門で､立替は無いとされる。出土土器より 7 世紀後半の築城で、８世紀前半には山城としての役割を終えていたことから、城門として機能したのもその範囲であろう。ただ建物が朽ちた後も、しばらくは通路として利用されていた。

一方、城門が備え持つ本質的機能である防御的側面はどう変化するのか。よく引き合いに出されるのは、大野城や基肄城と連動して大宰府防衛を担った水城の西門の調査成果である。大堤が築かれた当初（664 年）は、掘立柱構造で間口は 4.2 ｍと狭く、側面に石垣を築いた堅牢な城門であったが、700 年前後には礎石立の八脚門に立替られ、屋根に瓦を葺き、間口も約 10m と広くなる。つまりこの城門は筑紫館（鴻臚館）から大宰府へと至る官道にあるが、唐など外国の使者を始めとする人々の往来を意識した大宰府の表玄関に相応しい壮麗な「見せる門」へと変化したと考えられる。対外的緊張の緩和とともに城門の機能が変質することは、先の「分布・選地」で触れた小澤氏の論にも通じる。

建物がない城門

城門は建物やそれに連なる城壁等が築かれ、お互いに作用しながら防御性を高めることで完成を迎える。しかしながら発掘調査で建物の痕跡が無く、城門が未完成であったと考えられる場合がある。いわゆる「建物がない城門」である。その事例として帯隈山神籠石北門と御所ヶ谷神籠石第二東門があり、筆者も過去に言及した（山口 2006）。

まず未完成であったという考え方である。未完成でも城壁等のあり方から工事初期段階、工事のある段階での意図的中止など色々な場合を想定することができる（亀田 2014）。

一方、完成していたとする考え方もできる。まず単に出入り口で建物は要らなかったとする場合である。つまり城門の位置が城壁ラインの裏手で城門防御を重視しなくても良かったとする考えで、帯隈山神籠石北門を調査した鏡山猛氏はそのように推定した（佐賀県教委 1967）。また完成していたとする場合、城門建物があったことも想定できる。つまり城門建物が礎石立構造で、柱を置いたのが石製唐居敷ではなく木製であり、残らず腐食した可能性である。ただ木製唐居敷の認定条件として地山加工、整地層、玉石など根石の有無などを検証する必要がある。礎石立城門では屋根に瓦を葺くことがあり、城門建物の痕跡が無くても、瓦が出たらその場合を考えなければならない。また遺構面が削平を受けていることも想定でき､「建物がない城門」でも色々な可能性を探る必要がある。

上部（上屋）構造

発掘調査から城門建物の上部構造をうかがうことはなかなか難しい。ただ接する城壁の高さから重層門の可能性を指摘できたり、瓦がある程度出土すれば屋根を持っていたと考えることもできる。しかし、鬼ノ城西門の復元時にも議論になったように、屋根の有無ひとつとっても結論を出せないくらい非常に難しい問題である。上屋を含む上部構造について積極的に取り組んだ研究は向井氏や小澤氏、鬼ノ城西門の復元にあたって主導的役割を

果たした濵島正士氏らの考察がある（小澤 2010、濵島 2011、向井 1999）。都城や官衙の門については、古建築や絵巻物などの絵画資料などを援用しながら、発掘遺構から上部構造を復元する上での考え方が示されている（清水 2010）。いずれにしても、平面だけでなく、常に上部構造の復元を考えながら調査に臨む姿勢が重要である。

城門遺構の整備

最後に城門遺構の整備について考える。再三述べるよう、鬼ノ城西門では城門建物の実物大復元が行われているが、整備の手法として城門建物まで復元することは今後も少数派であると思われる。主流となるのは、建物の柱穴位置を木柱で示したり、崩落した壁面の石垣を補いながら積みなおしたり、説明板を設置したりする、いわゆる表示整備であろう。この事例として鬼ノ城北門の整備状況を詳しく紹介した。なお整備は盛土や土嚢などで遺構の保護措置を行った上で行われることが多いが、鬼ノ城では遺構同士の整合が取れないため、遺構上に盛土などをせず、直接復元整備を行っている（総社市教委 2011）。

整備後の問題はその後の維持管理である。城門に限ったことではないが、日常的管理として、年間を通じて快適に見学できるよう草刈等を行う必要がある。山城は広大な面積をもつためどこの遺跡も十分な人材や予算の確保ができていないのが実情で、ボランティアの育成等も思案していると思われる。また建物の表示柱を木柱で行えば、防腐処理を施したり、朽ち果てた場合は差替えなければならない。あるいは調査で新知見を得られれば、説明板の内容を更新しなければならない。このように維持管理には問題が尽きない。

表示整備に関連して、近年、遺跡の活用において、遺跡現地での理解促進を補助するAR（Augmented Reality[拡張現実]）・VR（Virtual Reality[仮想現実]）などデジタルコンテンツの導入事例をよく見かけるようになってきた。スマートフォンやタブレットなどスマートデバイスの普及が進んだ今日、インターネットを通じて誰でもダウンロード可能なアプリケーションの開発が徐々に進んでおり、九州では福岡城や鴻臚館、肥前名護屋城、昨年世界遺産に登録された三重津海軍所跡などで導入されている。デジタルコンテンツを用いれば、遺跡に復元建物などハードの整備を行っていない場合でも、遺跡のかつての景観や人々の様子を再現し、来訪者の追体験を可能とする。また、遺跡現地でのガイダンスやナビゲーションとして、関連情報を文字や音声、画像や映像などで提供することもできる。一方、導入後のデジタルコンテンツの維持管理やハード面での遺跡整備との関係をどうするかなど、検討課題も多い。さらに、絶えず進歩する技術革新の中、今後これらの技術やその利用が、どのような方向性を持つのかを見据えておくことも必要である。

おわりに

以上、表題に沿って論述してきた。一読して分かるように、本論は日本の古代山城研究に限定した内容であり、わが国の古代山城の祖形となり、かつ併行して存在した朝鮮三国や統一新羅の古代山城等の調査事例、研究を反映することはかなわなかった。これは筆者の怠慢で、語学力の無さを痛感している次第である。また研究史の遺漏、あるいは論旨を一部読み違えている箇所もあるかもしれないがご寛容願いたい。本小論が今後の古代山城研究の一助となれば幸いである。

註

（１）熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館 HP

http://www.kofunkan.pref.kumamoto.jp/kikuchijo/

（２）水城・大野城・基肄城 1350 年事業 HP

http://www.mok1350.org/

（３）絵図が確認された当時にも検討が行われている（高倉 1983）

（４）韓国では「確金（ファクセ）」と呼ばれている。国内では古代山城以外に古代寺院例（奈良県山田寺跡）が１例知られる。朝鮮半島、大陸からの出土例は以下の通りである（山田 2011）。

【韓国】報恩三年山城南門例１、清州父母山城北門例１、忠州忠州山城北門例１、聞慶姑母山城西門例２、楊州大母山城東門例３、同西門例１

【北朝鮮】平壌長安城（平壌城）城門例２

【中国】瀋陽石台子山城東門例２？、同南門例２？、同西北門例３

（５）調査担当者である渡邊誠氏（高松市）より御教示いただいた。

（６）金田城の近年の整備状況については、調査担当者の田中淳也氏（対馬市教育委員会）より御教示いただいた。

（７）屋嶋城の近年の整備状況については、渡邊氏より御教示いただいた。

（８）古代山城ではないが、東北の城柵（志波城、払田柵等）で門の復元例がある（村田 2010）。

参考文献

赤司善彦 2012「古代山城と GIS」『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会

赤司善彦・光谷拓美 2012「大野城の築城年代再考―太宰府口城門出土木柱の年輪年代の測定から―」『東風西声』第７号　九州国立博物館

稲田孝司 2012「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第 34 号　日本考古学協会

岡田英男 1984『門』（『日本の美術』第 212 号）至文堂

小澤佳憲 2008「北石垣城門と鋳鉄製軸受金具について」（九州国立博物館『大野城と四王寺』）

小澤佳憲 2010「新発見城門について」（福岡県教育委員会『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』（福岡県文化財調査報告書第 225 集））

小澤佳憲 2014a「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第２号　熊本県教育委員会

小澤佳憲 2014b「基肄城跡東北門の唐居敷軸摺穴中に残された軸摺金具について」『九州考古学』第 89 号　九州考古学会

小澤佳憲 2015「大野城の城門」（九州歴史資料館『四王寺山の 1350 年―大野城から祈りの山へ―』）

小田富士雄 2012「鞠智城の創建をめぐる検討」『鞠智城跡Ⅱ』（熊本県文化財調査報告第 276 集））

鏡山猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房

亀田修一 1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』第 42 巻第３号　考古学研究会

亀田修一 2002「朝鮮半島古代山城の見方」（西谷正編『韓半島考古学論叢』すずさわ書店）

亀田修一 2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ―論考編１―』熊本県教育委員会

城戸康利 2007「大野城・新発見の城門」『溝漊』第 13 号　古代山城研究会

九州国立博物館 2015『古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―』

九州歴史資料館 2008『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅴ平成 18・19 年度』
九州歴史資料館 2009『水城跡』
九州歴史資料館 2014a『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ平成 24・25 年度』
九州歴史資料館 2014b『大宰府史跡ガイドブック 1 特別史跡水城跡』
九州歴史資料館 2015a『四王寺山の 1350 年―大野城から祈りの山へ―』
九州歴史資料館 2015b『大宰府史跡ガイドブック 2 特別史跡大野城跡』
葛原克人 1981「古代山城の特色」(児玉幸多・坪井清足監修『日本城郭大系別巻Ⅰ城郭研究入門』新人物往来社)
葛原克人 1994「朝鮮式山城」(佐藤宗諄編『日本の古代国家と城』新人物往来社)
葛原克人 2002「備中鬼ノ城の創築期をめぐって」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会
熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡Ⅱ』(熊本県文化財調査報告第 276 集)
西条市教育委員会 2009『史跡永納山城跡Ⅰ』(西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集)
坂井秀弥 2010「地方官衙と門」(奈良文化財研究所『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書官衙と門』(奈良文化財研究所研究報告第 4 冊))
佐賀県教育委員会 1965『おつぼ山神籠石』(佐賀県文化財調査報告書第 14 集)
佐賀県教育委員会 1967『帯隈山神籠石とその周辺』(佐賀県文化財調査報告書第 16 集)
清水重敦 2010「都城・官衙における門の建築」(奈良文化財研究所『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書官衙と門』(奈良文化財研究所研究報告第 4 冊))
下原幸裕 2013「大野城跡と発掘調査成果」『シンポジウム阿志岐山城を語る』筑紫野市歴史博物館
下原幸裕 2014「大野城クロガネ岩城門出土の軒丸瓦」『都府楼』第 46 号　古都大宰府保存協会
杉原敏之 2006「大野城出土柱根の刻書」『九州歴史資料館研究論集』31
総社市教育委員会 1997『総社市埋蔵文化財調査年報 7（平成 8 年度)』
総社市教育委員会 1998『総社市埋蔵文化財調査年報 8（平成 9 年度)』
総社市教育委員会 1999『総社市埋蔵文化財調査年報 9（平成 10 年度)』
総社市教育委員会 2005『古代山城鬼ノ城』(総社市埋蔵文化財発掘調査報告 18)
総社市教育委員会 2006『古代山城鬼ノ城 2』(総社市埋蔵文化財発掘調査報告 19)
総社市教育委員会 2008『総社市埋蔵文化財調査年報 17（平成 18 年度)』
総社市教育委員会 2011『鬼城山国指定史跡鬼城山環境整備事業報告』
成周鐸・車勇杰 1993「韓日古代城門礎石初探」『古文化談叢』第 30 集（中）九州古文化研究会
高倉洋彰 1983「古図に現れた大宰府」『佛教藝術』146 号　毎日新聞社
高松市教育委員会 2003『史跡天然記念物屋嶋』(高松市埋蔵文化財調査報告第 62 集)
高松市教育委員会 2008『屋嶋城跡Ⅱ』(高松市埋蔵文化財調査報告第 113 集)
高松市歴史資料館 2013『屋嶋城が築かれた時代』
太宰府市教育委員会 2015『大野城跡 1』(太宰府市の文化財第 125 集)
対馬市教育委員会 2008『古代山城特別史跡金田城跡Ⅲ』(対馬市埋蔵文化財調査報告書第 5 集)
対馬市教育委員会 2011『古代山城特別史跡金田城跡Ⅳ』(対馬市埋蔵文化財調査報告書第 6 集)
東亜考古学会 1953『對馬』(東亜考古学叢刊乙種第 6 冊)
長沼賢海 1931「大野城及び四王寺遺蹟」『福岡県史跡名勝天然紀念物調査報告書』第 6 輯　福岡県
奈良国立文化財研究所 1990『年輪に歴史を読む―日本における古年輪学の成立―』(奈良国立文

化財研究所学報第 48 冊）
濵島正士 2011「西門ほかの復元について」（総社市教育委員会『鬼城山国指定史跡鬼城山環境整備事業報告』）
平岡岩夫 1999「屋嶋城跡の新発見の石塁に関して」『溝瀆』第 8 号　古代山城研究会
福岡県教育委員会 1991『特別史跡大野城跡Ⅶ』
福岡県教育委員会 2006『特別史跡大野城跡整備事業』（福岡県文化財調査報告書第 210 集）
福岡県教育委員会 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ｖ』（福岡県文化財調査報告書第 225 集）
文化財保護委員会 1963『石城山神籠石第一次調査概要』
文化財調査委員会 1964『石城山神籠石第二次調査概要』
美津島町教育委員会 2000『金田城跡』（美津島町文化財調査報告書第 9 集）
美津島町教育委員会 2003『金田城跡Ⅱ』（美津島町文化財調査報告書第 10 集）
宮田浩之 2010「西海道官衙の門―北部九州の事例を中心として―」（奈良文化財研究所『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書官衙と門』（奈良文化財研究所研究報告第 4 冊））
向井一雄 1991「西日本の古代山城遺跡―類型化と編年についての試論―」『古代学研究』第 125 号　古代学研究会
向井一雄他 1996『讃岐城山城の研究』（『溝瀆』第 6 号）古代山城研究会
向井一雄 1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』第 27 号　地域相研究会
向井一雄 2001「古代山城研究の動向と課題」『溝瀆』第 9 ・10 合併号　古代山城研究会
向井一雄 2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』奈良文化財研究所
向井一雄 2009「日本の古代山城研究の成果と課題」『溝瀆』第 14 号　古代山城研究会
向井一雄 2014「鞠智城の変遷」『鞠智城跡Ⅱ―論考編２―』熊本県教育委員会
村上幸雄 2010「鬼ノ城―城門遺構の調査と出土土器による年代―」『古代文化』第 61 巻第 4 号　古代学協会
村田晃一 2010「古代奥羽の城柵・官衙の門と囲繞施設」（奈良文化財研究所『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書官衙と門』（奈良文化財研究所研究報告第 4 冊））
八木充 2014「大野城の門柱刻書について」『日本史研究』第 624 号　日本史研究会
山口裕平 2003「西日本における古代山城の城門について―その類型化と変遷―」『古文化談叢』第 50 集（上）　九州古文化研究会
山口裕平 2006「御所ヶ谷神籠石の城門構造」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史資料編原始・古代』行橋市）
山田隆文 2011「鉄製の門扉軸摺金具について」『勝部明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会
山元敏裕 2009「香川県高松市屋嶋城跡」『溝瀆』第 14 号　古代山城研究会
行橋市教育委員会 2006『史跡御所ヶ谷神籠石Ｉ』（行橋市文化財調査報告書 33 集）
行橋市教育委員会 2014『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅱ』（行橋市文化財調査報告書 53 集）
横田賢次郎 1993「大野城の城門―大宰府口城門を中心として―」『考古学ジャーナル』369 号　ニュー・サイエンス社